

未来創造アイランド九州

～九州の健康・スポーツ・社会を創造する新たな提案～



九州の自立を考える会第1回政策提言

第1章 提言の骨子

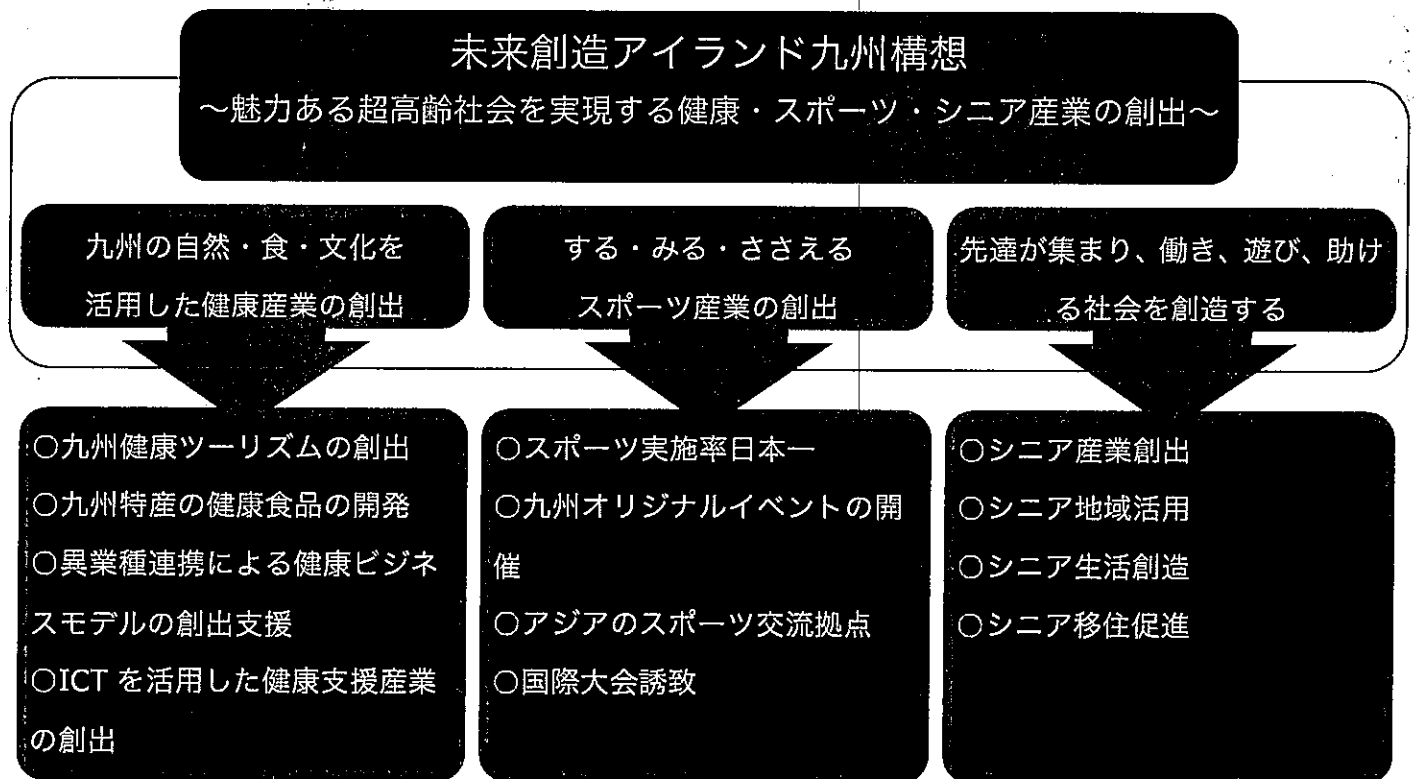
(1) はじめに

国立社会保障・人口問題研究所によると、2040年の九州における65歳以上人口が3割以上の市町村が全体の「91.9%」と超高齢社会を迎える事が予想されている。

このような社会の中で、「スポーツは、～中略～ 今日、国民が生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営む上で不可欠のものとなっている。（スポーツ基本法前文）」と扱われ、今後の私たちの生活上の様々な課題を解決するための役割を期待されている。

今回の提言の趣旨は、超高齢社会において、「スポーツ」を核として健康、食、文化、観光等をキーワードとして、「魅力ある超高齢社会を実現する健康・スポーツ・シニア産業の創出」とした未来創造アイランド九州構想を提言する。

(2) 提言の要旨



第2章 「九州の自然・食・文化を活用した健康産業の創出」

1) 政策立案の背景

(キーワード：健康観光資源、高齢社会の健康問題、健康産業、地域活性化)

現代においては、団体観光客による観光の形態が観光・周遊型から個人客中心の体験・滞在型へと変化しており、観光資源の考え方が変わりつつある。グリーンツーリズムやブルーツーリズムなど「そこにしかないもの」「そこでしかできないもの」が注目され、地域において身近で様々な地域資源が、癒やし、健康づくり、自然・環境保護などの価値を付加されることで、魅力ある観光資源として考えられるようになっており、体験型の旅行パックが人気を得ている。こうした中、さまざまなツーリズムビジネスが生み出されているが、はじめにでも触れた理由から今回は特に「ヘルスツーリズム」に注目する。

観光庁観光立国推進基本計画によると、「ヘルスツーリズムとは、自然豊かな地域を訪れ、そこにある自然、温泉や体に優しい料理を味わい、心身ともに癒され、健康を回復、増進、保持する新しい観光形態であり、医療に近いものからレジャーに近いものまで様々なものが含まれる。長期滞在型観光にもつなげるツーリズムであり、地域や民間とも連携して取り組める。」としている。

ヘルスツーリズムの具体的効果は、観光ビジネス研究会の加藤氏によると①医療費の適正化②宿泊機会の増加③地域のイメージアップ④地域への経済効果⑤あらたな産業の創出⑥地場産業の振興⑦施設・インフラ整備の誘発などを挙げており、九州の自然・食・文化を活用するにふさわしい産業であると考えられているからである。

このような背景から「九州の自然・食・文化を活用した健康産業の創出」として以下の具体的政策を提言する。

2) 具体的政策

(1) 九州健康ツーリズムの創出

中高年のグループや子育てを終えた熟年夫婦の旅行が増加し、自然との触れ合いを通じて自らを見つめ直す旅が人気を呼んでいる。「旅には体をリラックス

スさせ、疲れた心を癒やす効果がある」とされており健康づくりを目的としたヘルスツーリズムの確立が必要である。

またヘルスツーリズムは、旅行者と住民とを健康にするとされており、九州の豊かな自然や多くの地域資源は、温泉療法・森林療法・海岸療法などのより医療的なヘルスツーリズムまでの可能性を秘めている。

(2) 九州特産の健康食品の開発

九州各県には様々な特産品があり、それらを活用した健康食品の開発を行う。特産品は、該当地域で生産・加工された物であり、地域の気候風土と密接に結びついており、それらを消費者のニーズに対応した商品として開発する。安心で安全な食品を開発するために、地域独自の原料や加工技術・ノウハウを活用することができる。

また、①に挙げたヘルスツーリズムに連動させ、滞在期間中の食事やお土産としての活用が期待される。

上天草市では、名山「次郎丸岳」のふもとで収穫される新鮮な鷹の爪を乾燥させ、粉末唐辛子として商品化した「まいったか！朱次郎」が、料理の隠し味としてだけでなく、ダイエット食品としての人気も高まりつつあり、このような食品の開発、販売は九州各地で行われているものと思われる。これらの



商品について、健康をキーワードとして開発するだけでなく、九州ブランドとしての販売戦略等を検討して行くことが重要であると考える。

(3) 異業種連携による健康ビジネスモデルの創出支援

これまでの健康ビジネスは、フィットネス、治療、サプリメント、ヒーリング等の主な産業の他、周辺産業としての宿泊、観光、公共サービス等の連携が希薄であったと感じている。

そこで、地域毎の「健康ビジネスモデル」を策定し、健康福祉、商工観光、農林水産など様々な業種を横断的に結びつけ、地域の関係団体の有機的な繋がりにから、面としての「健康ビジネスモデル」の育成を図る。

健康ビジネスそのものは、今後とも市場の成長が見込まれている分野であり、各産業においても注目を集める部分ではあるが、先に述べた通り、単体として

終わらない、地域の中でそのバリューチェーンが存在するビジネスモデルの先駆けを支援する。

若々しさを保ち元気な暮らしを楽しみたい。病を得ても使い勝手のいい介護・医療機器で生活の質を高めたい。納得できる出費なら惜しまない。そんな消費者ニーズがある中で、異業種の意外な組み合わせが、全く新たな製品やサービスの誕生につながって行くものと考えている。

(4) ICT を活用した健康支援産業の創出

ICT は、様々な産業に活用されつつあるが、健康産業においても例外ではない。特に、過疎地域における高齢者の健康の維持管理に関しては、その特性を發揮するものと考えている。

それは、過疎地域の交通機関の課題による。通常、健康教室等は、福祉センター等で実施され、巡回バス等による送迎が行われる。しかしながら、これらの事業の成果を得るためにかかる経費や労力は少なくない。この課題を解決するのが、ICT の特性である。ICT 技術の向上や、機器の価格の適正化等により、各家庭等へ機器を導入し、情報の双方向通信によるさまざまな、健康支援システムを提供することが可能であると考えている。具体的には、双方向による動画通信とセンシングセンサー等を活用し、遠隔地においての健康教室や健康状態のチェック、また参加者同士のコミュニケーション等可能性は多様である。総務省の「ICT を活用したまちづくり」事業においても先進的な取組みが進められているが、まだ実用段階とは言えない中、これらのシステムやプログラムを産業として確立していくことは、今後の新たな産業となりうると考えている。

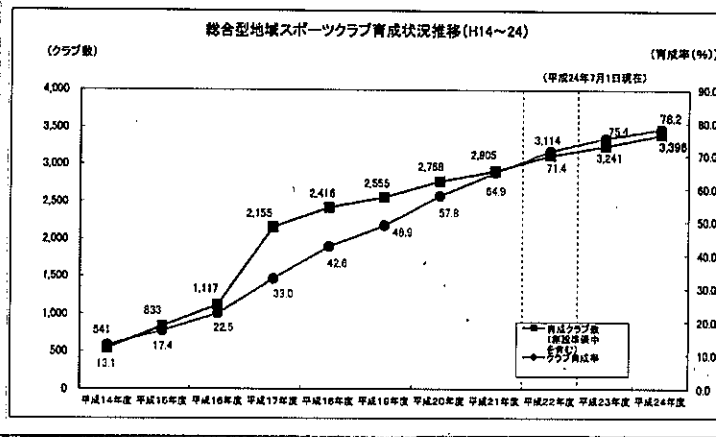
第3章 「する・みる・ささえるスポーツ産業の創造」

1) 政策立案の背景

する・みる・ささえるスポーツとは、実際に自分たちが活動の主体となってスポーツの場に参加するというかわりかた「するスポーツ」。さまざまなレベル（トップレベルから自分の子どもや孫が参加する）の大会や試合を観戦する「みるスポーツ」。これらの様々なスポーツシーンを成立させるため裏方として、ボランティアとして関わりを持つ「ささえるスポーツ」という3つのスポーツへの関わり方を示している。

私たちは、現代において、これらの3つのスポーツへの関わり方の中に新たなスポーツ産業の可能性があると考えており、またその契機として諸要因が存在している。

みるスポーツにおいては、
 去る2013年9月8日に「東京オリンピック」の2020年の開催が決定された。その経済効果は、数兆円から百数十兆円と、すでに各紙の紙面を賑わせている。1964年の東京オリンピックでは、



周知の通りさまざまなインフラの整備が行われ、あらたなサービスによる産業の創造が行われている。

するスポーツでは、1995年からスタートした文科省の総合型地域スポーツクラブの育成事業もその後、別団体への委託事業時代を含め十数年を経過し、2012年時点で全国3,396クラブ、九州では約400のクラブが活動している。

総合型地域スポーツクラブとは、幅広い世代の人々が、各自の興味関心・競技レベルに合わせて、さまざまなスポーツに触れる機会を、地域住民自らが創造し、享受する、地域自立型のスポーツの場である。

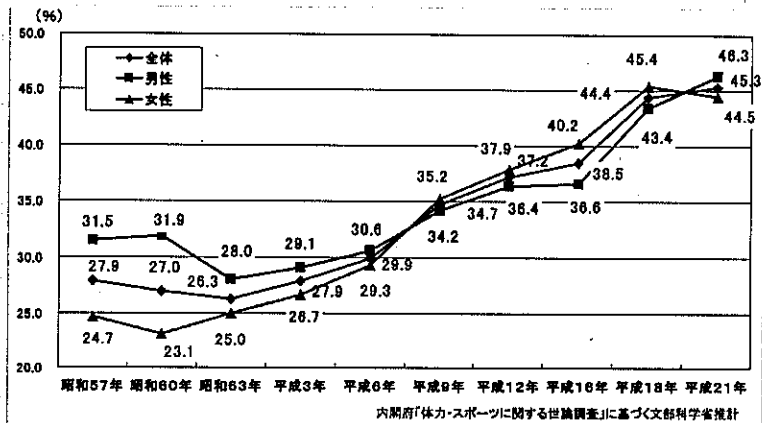
また、「スポーツ実施率（成人における週30分以上1回以上のスポーツ実施者の割合）」の調査において、実施者が好む種目の上位に「ジョギング、ランニング」という種目が、多くの地域においてランクインする。これらを背景にして、5,000名を超える参加者が集まる市民マラソン大会は、全国に150を超え、熊本においても2012年から「熊本城マラソン」として開催されている。これらの市民マラソン大会には、全国からのツアーが生まれ、スポーツツーリズムという新たな産業が芽吹いている。また、大会の開催にあたっては、3,000名を超えるボランティアがささえる形で関わりを持つてる。

こうした背景を踏まえ、「する・みる・ささえるスポーツ産業の創造」として、以下の具体的な政策を提言する。

2) 具体的政策

(1) スポーツ実施率日本一

我が国のスポーツ実施率の変遷は右グラフの通りであるが、2010年に発表されたスポーツ立国戦略では、その目標として、「できるかぎり早期に、成人の週1回以上のスポーツ



実施率が3人に2人(65パーセント程度)、成人の週3回以上のスポーツ実施率が3人に1人(30パーセント程度)となることを目指す。」としている。現在熊本県のスポーツ実施率は、45.0%であり、これらを指標としてスポーツ実施率日本一を目指す。その環境としては、先にあげた総合型地域スポーツクラブの育成の発展的推進であり、シニア世代・障がい者の活動の促進にあると考えている。

これらの取組みは、熊本県スポーツ振興計画にも明示された施策であり、これらの推進が、以下3項目の取組みの成果を含め、「スポーツ」というサービスを産業化、事業化するための土台となる部分であることをふまえ、スポーツサービスの需要を更に高める取組みとして推進すべきであると考えている。

(2) 九州オリジナルスポーツイベントの開催

現在各種の全国規模のスポーツイベントが開催されており、先に触れた市民マラソン大会等は、特に盛んとなっている。

そこで、従来のイベントの質的な改善を含め、新たな集客のためのスポーツイベントとして九州オリジナルのスポーツイベントの開催を提案したい。

食文化の業界では、「B-1グランプリ」というB級グルメのイベントが開催されるが、これと同様にいわゆるマイナーなスポーツや新しいスポーツ、また九州の伝統的行事をスポーツイベント化し、スポーツツーリズムの目玉企画とする。メディアとタイアップし、世代を超えて参加可能な、健康で楽しみあるスポーツとして、競技化し継続した開催をする事で、参加のリピーターをつく

り、またオリジナルの競技場等の建設も視野にいれイベントとしてまた、日常的な体験的観光のスポットとしてその種目の「聖地」を体験できる場として確立する。これらの取組みは、第2章に触れた「ヘルスツーリズム」と連動した「スポーツツーリズム」として、相乗効果が期待される。

(3) アジアのスポーツ交流拠点事業

九州がアジアに近接しているという立地から、アジアのスポーツ交流拠点としての取組みを進める。近年、サッカー界においても、アジア地域で活躍する日本人選手は数十名を数え、また、Jリーグに所属するチームの中には、アジアのリーグへ参画する動きを見せている。

こうした中で、アジア地域とのスポーツの距離は確実に縮まってきており、先のサッカーをはじめとして、スポーツによる国際交流の拠点として、アジア各国との交流を進めるための事業を展開する。

また、②に触れた「スポーツツーリズム」という観点から、九州内の「みるスポーツ」資源の活用にも注意したい。その際、ターゲット層を明確にし、富裕層、若年層、地域などに配慮したスポーツツアーを、九州各県に活動するプロスポーツチームの活動と結びつける。他地域との差別化を図り、スポーツ施設、スポーツイベント等をスポーツツーリズム資源として活用する。

(4) 国際大会の誘致

熊本県では、1997年に世界ハンドボール大会を開催し、熊本からスポーツを通じて世界へ情報を発信し、スポーツ施設の充実が図られ、県民は県出身選手の活躍に夢と感動を覚えた。

冒頭に触れたように2020年には東京オリンピックが開催される事が決定しているが、2070年を目処に「九州オリンピック」の開催誘致を進める。

先に触れた、「スポーツツーリズム」の中でも、最大級のイベントであり、日本初の首都以外での夏季オリンピック大会をまずこの九州からスタートさせたい。

第4章 「先達が集まり、働き、遊び、助ける社会を創造する」

1) 政策立案の背景

(キーワード：超高齢社会、シニア世代、地域特性)

団塊世代（1947～49年生まれ）の退職が進み、シニアマーケットに注目が集まっている。活動的でチャレンジ精神の旺盛なシニア層は「アクティブシニア」と呼ばれ、この層へ向けたサービスは今後数十年の課題でもある。

また、退職を迎えるシニア世代の経験・知識・能力の活用、若手への継承は、民間企業の中でも課題としてあげられており、今後のあらゆる産業の需要と供給の両面において、「シニア」は重要なキーワードとなっている。

少子化・人口減少が全国に先駆けて進む九州では、いち早くこのような現場は増加する。その課題の解決や新しい取組みが進められることにより、この「シニア」世代が、収入を得るために長く働き続けることを考えるならば、九州定住・移住という流れを作り出せるものとする。

一方で、年金等の収入のみとなった場合でも、収入金額自体が地域によって大きく変わらないのであれば、家賃や食料品が比較的安い地域を居住地とすることで、日常的な支出を抑え、経済的な余裕を生み出すことにも繋がる。

さらに、これらの「シニア」層が、日常生活での楽しみを見いだす事ができるサービスが展開されれば、より魅力ある居住地として、九州への移住・定住の流れが加速されるものと考えられる。

「シニア」層の長い経験の中で培われたスキルや知識を発揮できる場や環境を整え、そこで生き生きと仕事をしながら、各世代と交流のできる生活環境を持つ事ができれば、それは、個人にとってかけがえのない、生き甲斐ある人生となるに違いない。

こうした背景から、「先達が集まり、働き、遊び、助ける社会を創造する」として、以下の具体的な政策を提言する。

2) 具体的政策

(1) シニア産業の創出

高度経済成長期に首都圏へ流失した九州の人材が、シニア人材として今、UJターンを考えている。

九州経済調査協会が行ったアンケート調査によると、首都圏在住の九州出身のシニア世代の約3割が「UJターンを考えた事がある」とし、その約半数の方々が「就職先を見つけて、フルタイムの正社員として勤めたい」としており、その際の活用できるスキルとして回答されているのが「営業能力や交渉能力」で

ある。

この内容からも、第2章に触れた(1)九州健康ツーリズム、(2)九州特産の健康食品の開発、(3)異業種連携による健康ビジネスモデルの創出支援という3項目におけるビジネスシーンは、シニアの専門的知識やスキルが必要な産業であり、先のアンケート調査結果とも符合する。

健康ツーリズムにおける同世代のニーズに対する集客マーケティングや地域資源の有機的結合のための交渉、特産品の生産、加工に止まらない、販売戦略やブランディング戦略など活躍の場が期待される。

もちろん、現在高齢化が指摘される第1次産業においても、従来の産業形態を見直し、これらのツーリズム資源として検証、整備を進める事で、新たな活躍の場が獲得できるものと思われる。

(2) シニア地域活用

シニアの地域における活動は、産業だけではない。全国の各自治体においても、シニア世代の地域活動参加促進事業が進められており、その形態も様々である。その課題として多く挙げられているのは、参加の場づくりである。

(1)において、その一つの場を提供する取組みに触れたが、この他さまざまな地域活動の場を検討せねばならない。

具体的には、第3章に触れた総合型地域スポーツクラブも一つの形態となる。総合型地域スポーツクラブは、地域住民が自主的に活動する場であり、名称から想像されるスポーツ振興以外にも、芸術振興や、子育て支援の他、地域にある様々な生活課題を解決する場として、期待される組織である。総合型地域スポーツクラブの活動において、これまでさほど多くは注目されてこなかったこのシニアの地域における活動の場づくりという切り口は、総合型地域スポーツクラブの今後の活動の充実においても必要な事業分野となるものと思われる。そのための方策としては、活動意欲のあるアクティブシニアとの繋がりを作り、参加の場の提供を行い、活動の仕組みづくりの支援をし、最終的にはシニアがリーダーとなって、活動に責任を持って取り組むという、地域と活動するシニアに対する中間支援的な機能が求められる。

地域で活用できるシニアの能力として考えられる、職業的な知識や経験、環境、福祉、建築などの専門知識、技術、経理や事務などの実務経験などを、現

在の地域ニーズとマッチングさせ、スキルを加工し取り組む事で、シニアの弱点を克服して地域活動に迎え入れることができるような、教育の仕組みや、それに伴ったシニアの意識改革も重要な要素となる。

(3) シニア生活創造

(1)、(2)で触れたように、シニア世代が地域活動において、また地域でのビジネスシーンにおいて活躍できる場をつくることは、生き甲斐ある生活を送る事と無関係ではない。と同時に、現役世代とは違うライフスタイルで、余暇の時間を活用し、健康で豊かな生活を送る事ができる環境づくりが求められる。

総合型地域スポーツクラブで、スポーツや芸術活動に参加したり、九州内の健康ツーリズムに参加し、九州の特産品を加工した健康食品を食し、温泉に入り、地域の方々と交流するなどの共感体験を通して、心身ともに生き生きとした日々を送る事ができると考える。

これまで述べてきた各取組みは即、九州内におけるシニアの生活創造に結びつくものであり、九州内に身近で、魅力ある各地域の取組みが存在する事が、シニア層の日々の生活にも寄与するものであると考えている。

(4) シニア移住促進

(1)から(3)までの取組みにより、「魅力ある九州」の環境を整備すると同時に、UJI ターンのシニア世代を九州へ迎え入れるためには、そのための仕組みが必要である。

昨今ブームとなっている田舎暮らしを含めた移住促進は、実際には生活に慣れるまでに離脱するなどの課題がある。そこで、移住・定住・二地域居住を検討されている方、1週間～1ヶ月以上の滞在を希望されている方等を対象にした「軟着陸型移住体験」の場を設定する。これは、各自治体が管轄する様々な宿泊可能な公共施設を利用し、長期利用者として受け入れを行うものである。また滞在期間中には、農業体験（シイタケのコマ打ち等）、自然体験（ハイキング等）、郷土料理体験等、様々な健康ツーリズムの資源を活用し、体験の機会を提供することで、実際の移住へ向けた活動の場とのマッチング等を行う事が可能となる。特に、公共の宿泊施設等は秋季から翌春季までの閑散期の利用が少なく、施設利用の活性化にも繋がるものと考えられる。